

「平和への遺書・遺品展―戦没青年との対話―」に寄せて

先の大戦、アジア・太平洋戦争からすでに半世紀以上たった。平和と繁栄の現代に生きる若者からすれば、戦争体験は古老に聞く昔話の如くであろう。しかし、この半世紀の平和は先の戦争の大きな犠牲を思い、ふたたび悲劇を繰り返してはならないと決意し、人々が努力を重ねた成果であることを忘れてはならない。

一九三一年の満州侵略からアジア・太平洋に拡大した戦争は、四五年日本の敗戦により終結した。この間青年は一枚の召集令状で兵士となることを義務づけられていた。兵士は軍隊により外部との接触を制限され、家族への私信や日記にも「検閲」が行われた。この困難な状況の中で彼らは切々たる思いを綴った。これは、あるいは学芸を志した学徒兵の「こえ」であり、あるいは故郷に残した家族に心を配る農民・勤労者兵の「こえ」であり、さらには民族を異にしながら大日本帝国に動員された韓国・朝鮮人学徒兵の「こえ」である。

これらの若者は、すべて当時の国家の要請により学問と生活を打ち切られ、未来を断念させられ、死を強制された者たちである。国家の掲げた「大義名分」はいかなる正義であろうと、これらの青年の死を償うことはない。本会は、戦没学徒兵の貴重な遺稿類

の収集・保存・展示のため以前より『わだつみ記念館』の建設を提唱しているが、今回、記念館建設の促進をかねて、戦没青年の遺書・遺品展を企画した。ここに展示された戦没青年の記録に目を凝らし、耳を傾け、沈黙する遺稿・遺品と対話してほしい。

さらに『わだつみの悲劇を繰り返さない』というとき、ここにもう一つの意味を加えたい。これはとくに学徒兵の遺稿の場合であるが、いくつかの遺稿は、戦争への疑問、軍隊への批判、平和への熱意、中国侵略に対する反省を隠さない。いやさらに敗戦後の日本のあるべき姿まで述べている。これだけの思考力を持った優れた青年がなぜ戦死を受け入れざるをえなかったのか。ここからは戦争の悲惨ばかりでなく、知識ある青年の「孤立」に思いを致してほしい。

おわりに戦没者の遺稿・遺品を今日まで大切に保存され、ご提供いただいた御遺族および篤志の方々、諸団体に厚く御礼申し上げます。

二〇〇二年八月十日

日本戦没学生記念会

目 次

「平和への遺書・遺品展 ― 戦没青年との対話―」に寄せて…日本戦没学生記念会

戦没学徒兵の遺稿

- 1 学徒出陣へ…………… (3)
板尾興市 柳田陽一 長門良知 浅見有一 池田浩平 松岡欣平 山根明 鷺尾克己
- 2 大陸の戦野から…………… (7)
篠崎二郎 田辺利宏 奥村克郎 渡辺直己 北川智
- 3 戦火は太平洋上へ…………… (10)
横山末繁 石岡俊蔵 田村正 井上淳 金綱克己 中村勇 深沢恒雄 竹内浩三
西村秀八
- 4 学問への渴き…………… (14)
中尾武徳 戸谷敏之 大島欣二 吉村友男 中村徳郎 松田清 松永龍樹 松永茂雄
- 5 愛と戦いと死…………… (17)
佐々木八郎 宅嶋徳光 大塚晟夫 井上長
- 6 特別攻撃隊と沖縄戦…………… (20)
上原良司 久保恵男 長谷川信 小川清 林憲正 海上春雄 御厨卓爾 上村元太
渡辺研一
- 7 空襲の炎のなかで…………… (24)
住吉胡之吉 平井聖 (浅見有一 井上長 金綱克己)
- 8 戦後に…………… (26)
関口清 北村洋平 稲垣光夫 木村久夫

戦没農民兵士の遺稿…………… (28)
藤原一郎 千田懿清 梅原晤 岩淵慶次

松阪市戦没兵士の遺稿…………… (31)
梅田正治 氏木長次郎 城久蔵

戦没画学生の遺作品 (レプリカ)…………… (34)
佐久間修 日高安典 大貝彌太郎

戦没朝鮮人学徒兵の遺稿 (コピー)…………… (35)
卓庚鉉 韓聖洙 廬龍愚 趙文相

年表「中国侵略からアジア・太平洋戦争へ」…………… (37)

出品リスト…………… (38)

戦争の惨禍を根絶するために…………… 村上 光彦…………… (43)

出品・協力者のお名前…………… (44)

特別展示「東京大空襲・戦災資料センター所蔵の写真・資料」

戦没学徒兵の遺稿

1 学徒出陣へ

一九四三年十月、政府は、それまで大学高専在學生に認めていた徴兵猶予措置を文科系學生について停止した。これは戦線においてとくに下級將校の消耗が激しくなったので、すでに軍事教練を受けた知的な能力ある青年を動員するためであった。一般の國民は満二十歳になると國民皆兵の義務（兵役法）により軍隊への徴集に応じなければならなかったのに比べて猶予は特権でもあった。文科系學生はこの猶予停止により急いでそれぞれの本籍地で徴兵検査を受け、合格者は、陸軍は十二月一日、海軍は十二月十日に入隊した。ガダルカナル撤退、アッツ島玉砕と太平洋戦線の敗勢濃い状況でのこの動員は、出陣学徒に悲痛な決意を求めた。

十月二一日の神宮外苑での壮行会は、東条首相の訓示に出陣学徒代表が「生ら（我ら）もとより生還を期せず」と応え、手を振って送る女學生が泣きながら学徒にかけよる悲壮な「死への行進」となった。この時徴兵猶予停止の学徒は約九万人。うち推定四六〇〇人が戦死した。



挙手して学徒を送る岡部長景文相

板尾 興市

一九二三（大正12）10月2日生。東京都出身。東京商科大学予科を経て、四三年（昭和18）10月本科進学。

四三年（昭和18）12月10日、横須賀の武山海兵団に入団。
四五年（昭和20）2月18日、監視艇隊として本州東方海上にて戦死。21歳。

以上の通り我々はここ二カ月足らずのうち
に文字通りペンを捨て書物を閉じて銃をとる
ことになったのです。このような処置は大東

亜戦争の開始以来すでに時間の問題として考えられていたものであり、現交戦国のいずれもが断行していることなるを思えば来るべきものが来たに過ぎぬのであり、何ら大きなショックは与えぬものでありますが、やはり一部には予想外に思い切った措置だとの感がないわけではありません。発表されたのが九月二十二日、それから一カ月で検査、一カ月で入営ですから、実にかつてなき迅速さであり小生らとしてもせっかく本科に進んで張り切つて学問に心身を入れんとしていたやさきですから実に残念なしいですが、日本の直面している現実がいかに切迫しているかを感じていますから、何とか諦めはつきません。それにしてもあまりに短い月日しか残されていないので、何ら今までの学問への努力をまとめた形でのこすこともできそうになく、読みさした本にしおりをはさんで出かけなければなりません。

ふたたび帰つて書物の前にすわるのはいつの日のことかと考えますと、まことに寂しいしだいです。

四三年（昭和18）10月5日付、父宛の手紙より

やなぎだ
柳田 陽一
よういち

一九一九年(大正8)3月5日生。岡山県出身。台北高等学校を経て、三九年(昭和14)、京都帝国大学文学部東洋史学科入学、四一年12月卒業、大学院進学。
四二年(昭和17)2月1日入営し、5月、千葉陸軍防空学校に入る。
四二年(昭和17)10月1日、千葉県木更津にて事故により遭難殉職。23歳。

応召盛んなり。

いよいよ非常時を思う。一刻一刻が奈落への顛落の刹那にある。何時か、今がその瞬間かもしれない。大きな、目には見えぬあらしがかかる。かける。かける。わけのわからないものが渦巻のごとく身をとりまく。それが私を未知の世界にふき上げる。何ていう時だ。人間とは、歴史とは、一体何なのだ。誰が歴史を動かすのだ。はげしい怒濤にもまれているような。幻の馬車のわだちがきこえる。眼に見えぬわだちの音が聞える。歴史とは何だ。人間とは何だ。一体俺をどうしようというのだろうか。

四一年(昭和16)7月12日の日記より



左上：眼鏡(遭難時着用)・階級章・収支帳
右上：留守宅あて葉書(陸軍検閲済) 下：日記帳・スクラップブック・『学道記』(遺稿集)(柳田陽一)



西田幾多郎書簡(父柳田謙十郎あて弔詞)



臨時召集令状(長門良知)

ながと
長門 良知
よしと

一九一八年(大正7)10月1日生。東京都出身。四二年(昭和17)9月、早稲田大学法学部卒業。
四二年(昭和17)10月1日、飛行兵として陸軍に入隊。
四四年(昭和19)10月26日、フィリピン、バシー海峡にて戦死。26歳。

赤紙の臨時召集令状を受取って今帰って来た。ただ予期のことか実現されたにすぎない。半弦の月に雲がとんでいた。夜中の突然の呼出しで、本郷区役所に往復する間に胸に感じたいささかの動揺も静まり平静が帰って来た。また昨日までと同じ、いや、つい先ほど、午後八時までと同じ心持の同じ生活がつづくであろう。書き改められねばならぬことはさらになのである。私は入隊の日にも、ただ簡単にこうくりかえすのみである。

今までと違った私に「なろう」と思っても、「なれ」と言われても、「なれる」はずがないではないか。いつまでたっても私は私であり、さらに据えた目には、一分のごまかしもあるはずはない。

種も仕掛けもないのだ。ごらんの通り。

四三年(昭和18)9月18日の日記より